[氏　名]　梅村　将成

[出身都道府県]　愛知県

[卒業期]　36 期（平成 24 年度卒）

「へき地勤務のコツ」

はじめに

へき地勤務を控えている皆さんに卒業生からのアドバイスです。医療と医学の違い、へき地医療に求められることは、などを語るつもりはありません。それらの答えは、先輩に言われるがままではなく、皆さんが自分で考え、実行し、成功・失敗の試行錯誤の上でしか得られないものです。

今回は、へき地勤務をより楽しく、有意義ものにするための私なりのコツをお伝えします。

共通言語を持とう！！

出身県であっても、へき地に精通している人は少ないでしょう。勤務地となった場所が見ず知らずということは往々にしてあります。僕もご多分に漏れず、その一

☆医学部卒業生の相談窓口☆
自治医科大学 地域医療推進課
TEL0285-58-7055　E-mail:chisui@jichi.ac.jp

人でした。そして、へき地で臨床医として仕事をすると必ずぶち当たるのは、言葉や文化の壁です。その壁をぶち破るために必要なのが「共通言語」です。

①方言＝共通言語

「先生、お腹がこんきい。」　「お腹が痛いの？」　「うーん、痛いというか、こんきい」

地域によっては症状を独特の言い回しで伝えることがあります。この一例、赴任当初は言葉のもつイメージが理解しにくく困った記憶があります。でも次第に地域の人の使う言葉をまねして使っているとネイティブのように使いこなせるようになりました。方言ともいえるかもしれませんが、この方言を使いこなせると地域住民との距離はグッと近くなり、より厚い信用を得られます。地域住民との距離を縮めるための大切な共通言語です。

②文化＝共通言語

「糖尿病、検査結果が悪くなっている」　「花があったからね」　「そうだね、それはしょうがない、ここから頑張りましょう」。

地域には伝統的な文化があり、それは地域住民の心のルーツでもあります。ここでいう花とは、「花祭り」という愛知県奥三河地方のお祭りを表す言葉です。どの赴任した先でも同じく大切なのは、地域住民が何を大切にして生活し、生活スタイル・生活の中の優先順位を理解することです。例えば、伝統的なお祭りを継承する

☆医学部卒業生の相談窓口☆
自治医科大学 地域医療推進課
TEL0285-58-7055　E-mail:chisui@jichi.ac.jp

ことを大切にし、精神的なルーツとしている患者にとって、お祭り準備からお祭り期間のお酒の付き合いは娯楽ではなく、生活の一部です。これを理解せず、そんなことしてはダメだ！と患者に指導しても誰もついてきてくれません。医師として許容できるところは許容する、ガイドライン・教科書には載っていない、主治医と患者で作り上げるテーラーメイド医療です。それが田植えなのか、漁なのか、祭りなのかは地方によって異なると思いますが、その地域の持つ文化を共通言語として認識・理解し、その上で患者の心に寄り添うことが求められます。

へき地医療をスムーズに行うためには溶け込むことが何より大切です。その町に住み、お祭りに参加し、町を散策し、どんどん溶け込んでいってください！そして町を理解して住民との共通言語を獲得してください！そうすると、皆さんへの信頼がぐっと厚くなると思いますよ。

☆医学部卒業生の相談窓口☆
自治医科大学 地域医療推進課
TEL0285-58-7055　E-mail:chisui@jichi.ac.jp